



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ハリー・ポッターと賢者の石』をホラー小説として読む
Author(s)	宮澤, 優樹
Citation	研究論集, 15, 25(右)-38(右)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.r25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60547
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_007_miyazawa.pdf



『ハリー・ポッターと賢者の石』をホラー小説として読む

宮澤優樹

要旨

世界的な人気を博したシリーズの第一作である『ハリー・ポッターと賢者の石』は、一見して夢に満ちたファンタジー小説だ。だがその表面的な覆いを取り払って見たとき、一般的に思われている明るい側面とは別の、「怖い」側面を読み取ることもできる。事実『賢者の石』では、「表面的な見かけの下にあるものを推理せよ」と言うかのように、隠蔽とその内実という組み合わせが多用されている。主人公のハリーが迎えられる世界は、普通の人間の目からは隠された世界だし、対峙することになる宿敵は、おどおどとした無難な人物の皮をかぶり、つねに近くにいる。これらはいずれも、なんの変哲もない見た目を隠れ蓑とし、ほんとうの姿を隠している。このようなプロット上の仕掛けが、物語全体についても当てはまっているのではないだろうか。作品の隠された姿へと、登場人物や情景が漏らす細部を順に追うことでたどり着くことができる。その先にあるのは、生死が軸となったハリーと宿敵との関係である。ハリーは、「例のあの人」と呼ばれ、すでに死んだはずの宿敵と共通する性質を持つ。ハリー自身もまた、生死の境において、直接には名指しえない性質を抱えている。そのことは、ハリーを「生き残った男の子」と呼ぶことが欺瞞であり、同時に、宿敵をはつきりと名指すことが、不誠実な態度であることを示唆する。したがって、『賢者の石』が迎えた結語、「名指しにくい相手を名指す」、「前を向いて生きる」という決意は、表面的な見せかけなのだと読める。前向きなメッセージが発せられる一方で、それとはちょうど逆の筋書きが描かれている。この物語は、児童文学という「隠蔽」と、それに並行する名状しがたい状態を描く、二重の小説なのである。

「かくれんぼ」

『ハリー・ポッターと賢者の石』（一九九七）は、一時的に見えなくなっているもの、隠れているものに彩られている。パブの中庭に隠された魔法の横丁、ロンドン中心部の駅に隠された魔法使い専用のプラットホーム、隠し通路をいくつも越えた先にある寮の談話室、森を跋扈する正体不明の残虐な存在、ターバンの上に潜む死んだはずの仇敵、そしてなにより、十年の時を経てようやく魔法使いの世界に再発見されるまでの、ハリー・ポッターの存在。見えないものの、隠されたものが絶えずそこにあるという感覚。それはときに冒険心をかきたてるものであり、ときに恐怖心をあおるものだろう。児童文学としての楽しさや魔法の世界のミステリアスさを強調するために、隠れたものやそこにはないはずのものを効果的に利用することは当然の手段である。だがそこに、単なる創作技法にとどまらない意味を読み取ることもできる。この作品中に隠されているものは、魔法の世界のような、いわば物語的に「普通」のものだけではないからである。

ハリーとその家族を例に挙げることができる。彼らの写真のことを考えてみよう。写真が死者の残した痕跡となることは、魔法がうずまきハリー・ポッターの世界でも同じことだった。だから、「この家のどこにも両親の写真はなかった」（四七）という表現によって、死んだ両親の不在が描かれている。逆に言うと、写真がないことによって、両親の存在が隠される。奇妙にも、これは生者であるハリー

にもあてはまっている。赤ん坊から少年へと成長したハリーに物語が移ってすぐ、写真によって時間の経過が印象づけられる場面のことである。

ダドリー・ダーズリーはもう赤ん坊ではない。写真には金髪の大きな男の子が写っている。初めて自転車に乗った姿、お祭りの回転木馬の上、パパとコンピュータ・ゲーム、ママに抱きしめられてキスされる姿。この部屋のどこにも、少年がもう一人この家に住んでいる気配はない。（三二）

ダドリーの成長が写真によって記録され、それを語りが追うことによってダドリーが存在していることが強調され、それに対比する私たちで、ハリーの存在のうすさが、写真の不在として説明される。ハリーは死んだ両親と同じく、写真によって存在を確認することができない。写真をとおして見ると、ハリーは死んだ両親と同じように、存在が隠されている。

隠蔽されたものが発見されることは、物語上、一種の必然だろう。だから両親の写真は、友人ハグリッドからのプレゼントというかたちで、物語の最後に現れる。この小説は一面として、隠れていた両親の写真を発見する過程なのである。死んだ両親の存在は、見えないうちに隠されていた。たとえ死んでいようと、捜せばその姿を見つけ出すことができる。だから魔法の世界の写真は、まるで本人がそこにいるかのようにいきいきとしているのかもしれない。かく

れんぼをする子どもが、隠れながらも高ぶりを抑えられないのと同じように。ハリーもまた、学校を救ったヒーローになるというかたちで、再発見されている。隠蔽されたものが再発見されようとする動きが、物語にはたしかにある。

しかしこれを、物語の解決と見ていいのだろうか。写真から考えると、ハリーは、死んだ両親と同じ状態にあった。ハリーは、死者と等しい状態にあったのである。そのことが示すのは、「生き残った男の子」であるハリーが、死者として描かれているということ。ハリーが「生き残った男の子」を標榜するのは、ごまかしだということである。物語のなかに、表面的なごまかしによって見るものを欺こうとする細部がいくつもあることはすでに述べた。主人公にかなしてさえ、よく知られる呼び名とその実態が異なるのならば、どうやらこの作品は、根本から嘘とごまかしを主題としているようだ。そのような問題意識を持ちながら、表向きの物語のうらに隠れた、もうひとつの物語を探索してゆこう。

隠蔽体質

『ハリー・ポッターと賢者の石』は、つねに秘密を覆い隠さずにはいられない、いわば「隠蔽小説」である。それをさらに詳しく吟味すると、秘密のヴェールの向こうに隠れている、常識的ではない何ものが見えてくる。

ひとつにそれは、一見して日常的な風景に隠されている魔法の世

宮澤 『ハリー・ポッターと賢者の石』をホラー小説として読む

界である。魔法使いならぬ普通の人間（「マグル」）の目には日常としか思えない風景のなかに（ときに不審を抱かせようとも）、魔法という「異常」はまぎれている。魔女が姿を変えたトラ猫が、やや不自然ながらも、出勤前の日常風景に加わっている。ハリーを魔法学校へと導くことになった手紙は、当初ほかの日常的な郵便と同様に、ポストへと投函された。魔法の商店街への入り口は、魔法を使えなくても入ることのできるパブのなかにある。キングズ・クロス駅の秘密のプラットホームは、なんの変哲もない壁の向こうに隠されている……。例を挙げればきりがなが、ともかく、事前に知らなければ日常としか思えない仕掛けの向こうにあるものが、魔法の世界なのである。そのことは、魔法使いの役所である「魔法省」の業務が「魔法使いや魔女があちこちにいるんだってことを、マグルに秘密にしておくこと」（九九）であることが端的に表している。魔法使いならばまず第一に、自分が「存在しない」ことにしなくてはならない。そのために、彼らは日常を隠れ蓑にしている。

このような隠蔽傾向をもった人びとが形作る世界へと、ハリーは足を踏みいれてゆく。しかしそこでもまた、彼と読者は徹底した秘密主義に直面することとなる。ハリーがはじめて魔法学校「ホグワーツ」を訪れた夜、それはすでにはじまっていた。校長のダンブルドアは、初日の挨拶の最後にこう忠告する。「とても痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい四階の右側の廊下に入ってはけません」（二八八）。どうしてその場所が立入禁止なのかは伝えられず、監督生のパーシーはいぶかることとなる。

「へんだな、どこか立入禁止の場所がある時は必ず理由を説明してくれるのに……森には危険な動物がたくさんいるし、それはだれでも知っている。せめて僕たち監督生にはわけを言ってくれてもよかったのに」(二八九)

ダンブルドアが立入禁止の理由を隠したことが、日常的なものであるわけではない。だが、四階の廊下のなかに隠されたものは、この一年のあいだ、つねにそこに鎮座することとなる。秘密が、時間の経過とともに日常的なものとなる。だからこそ、ハリーたちは学校生活のなかで「うっかり」その四階の廊下へと足を踏みいれてしまうことも起こりえた。「マグル」の世界と魔法の世界で「日常」という語の意味が異なることは当然だが、どちらの世界でもやはり、日常の向こう側に秘密は隠れ座している。

この小説では、そのような秘密を暴く役割をハリーが担い、物語を駆動させてゆく。規則を破って夜中に学校をうろついているとき、ハリーたちはたまたま四階の廊下に逃げこんでしまう。そこで出くわした「三頭犬」が、なにかを守っていることに気がつく。ハグリッドが漏らしてしまった情報や、たまたま気がついたヒントをもとに、そこに隠されているものが「賢者の石」であり、死んだはずの闇の魔法使いヴォルデモートがそれを狙っていることに気がつく……。

このようなプロットが示すとおり、この小説は、隠蔽されたものが明るみになるという動きによって前へと進んでいる。その末に、ヴォルデモートに協力して賢者の石を狙っていたのは、クイレル先生

だったという事実が暴き立てられる。では、徹底してものごとを隠蔽しようとしているこの小説が、もつとも隠したかった秘密というのは、「ほんとうの敵がクイレルだったこと」なのだろうか。

もちろん、表面的な物語のうえではそうだろう。だがこの小説が「隠蔽小説」であることを思いだしたとき、そのプロットさえも、隠蔽のための欺瞞なのではないかという疑いが生じる。隠されているのは、魔法の世界や敵の正体、賢者の石だけではない。そしてその隠されたものは、これらの秘密よりも重要なものに思える。その隠蔽された存在とは、ひとつにこの物語の主人公だからである。

隠されるハリー

ハリー・ポッターは当初、あたかもいない人間のように扱われ、存在を隠されている。そのことが写真をとおして確認できることをすでに述べたが、ここではもうすこし順を追ってみてゆきたい。まず冒頭からさっそく、ダーズリー夫妻は、ポッター家と自分たちとのつながりを隠そうとしている。しかも、ただそのつながりだけを隠そうとしているわけではない。苛烈なことに、彼らは妹夫婦の存在さえも隠そうとしている。

——あのポッター一家のことが誰かに知られてしまったら一巻の終わりだ。

ポッター夫人はダーズリー夫人の実の妹だが、二人はここ数

年一度も会ってはいなかった。それどころか、ダーズリー夫人は妹などいないというふりをしていた。(六)

ダーズリー夫妻は、実在するポッター家との関わりを隠そうとするのではなく、ポッター家が存在するという事実そのものを覆い隠そうとしている。これは単にダーズリー家のありさまをコミカルに描くエピソードにとどまらない。なぜなら物語をとおして執拗に、「隠されるハリー」という描写が繰り返されるからである。

ダーズリー家で成長を遂げていまだ、ハリーは存在が隠された人物として描かれている。まず、先に述べた写真の描写を通して、ハリーが「見えない」存在であることが示される(「この部屋のどこにも、少年がもう一人この家に住んでいる気配はない」〔三二〕)。そして、ハリーは部屋も与えられず、階段下の物置に住んでいる。いわば彼は、足元の見えない場所にいる。そうして人から隠されて生きてきたわけだから、自分宛ての手紙が届いたことは、彼にとってもっとも喜ばしいこととして表現される。

ハリーは手紙を拾い上げてまじまじと見つめた。「……」これまでの人生で、ただの一度もハリーに手紙をくれた人はいない。くれるはずの人もいない。友達も親戚もない……図書館に登録もしていないので、「すぐ返本せよ」などという無礼な手紙でさえももらったことはない。それなのに手紙が来た。正真正銘ハリー宛だ。(五三)

宮澤 『ハリー・ポッターと賢者の石』をホラー小説として読む

ここにいう図書館からの返本命令を受け取っただけでも、ハリーは喜んだだろうことが示唆される。それほどまでに自分の住所、すなわち居場所を知っている人がいるということ、自分という存在がこの場所にあるということを発見されることに飢えている。単に魔法学校からの入学許可を受け取るだけであれば、周りくどい手紙の挿話など必要ない。作者は、家に直接ハグリッドを訪問させればよかった。にもかかわらず執拗に届く手紙のエピソードをあえて挿入することによって、隠れているハリーが、発見されることを求めているという事実が強調される。ハリーをめぐる序盤の物語には、「見つけれられる」という救いが用意されているのである。

しかし、自分の存在が意図せず隠れてしまう宿命から、ハリーが完全に自由になったわけではない。一見すると、魔法界に入門したハリーは、どこにいても注目を集める人物となったように見える。はじめてたち寄ったパブ「漏れ鍋」で多くの人の注目を集めたように、誰にも発見してもらえなかった頃とはまるで正反対の人物となったように見える。しかしそれは、誤解をまねく偽りであるようだ。ハリーにとっていちばんの苦難は、他人から「見えないもの」のように自分が扱われることとして、やはり描かれているからである。入学して「組分け帽子」をかぶろうというとき、ハリーは緊張のあまり震えている。しかし、このときの緊張の仕方は、ふつうの生徒とは異なる。

ハリーは急に恐ろしい考えにとらわれた。ドキドキしているか

ら、そんな考えが浮かんでくるのだ。どの寮にも選ばれなかったらどうしよう。帽子を目の上までかぶったまま永遠に座り続けている——ついにマクゴナガル先生がやってきて帽子をぐいと頭から取り上げ、何かの間違いだったから汽車に乗ってお帰りなさい、と言う——もしそうだったらどうしよう？（一七九）

ここは一般の生徒なら、自分の意に反する寮に入れられることを恐れるはずのところだ。その恐れを、彼もたしかに抱く。しかしハリーは、自分がどの寮にも所属できないこと、住所不明の「いない存在」となることをも恐れているのである。

これが現実のものとなるのが、ハリーの失態により自分の所属する寮の得点が大きく減点されてしまったことだった。このときの出来事は、表面的にはハリーが「一番の嫌われ者」（三五九）になっってしまったこととして記述されている。しかしこのときの出来事を詳細に見ると、単に嫌われただけでなく、ハリーの存在そのものが隠れてしまっていることがわかる。同じ寮に住まう生徒たちは、「もうハリーに口をきかなくなつ」（三九八）ている。また同じ時期、ハリーが「シーカー」というポジションを務めるスポーツ競技「クイディッチ」のチームのなかで、チームメートは「どうしてもハリーと話をしなければならぬ時でも『シーカー』としか呼ばなかった」（三六〇）。いずれの場合においても、ハリーはダーズリー家にいたときと同じ、存在が無視される状態に陥っている。ハリーという名前が消去されている点でもまた、ダーズリー家がしたのと同じだっ

た。こうした点から、まぎれもなく存在するはずのハリーを隠そうという物語の動きを見てとることができる。

さらに、ハリー自身が主体的に、意図せぬまま自分の存在を隠してもいる。これは、ハリーの通う学校自体が、生徒に「隠れること」を誘っていることに起因する。夜、生徒が校舎のなかを歩くことが禁止されていることが、作中何度も強調されている。

「……夜、校内をウロウロするのは絶対ダメ。もし捕まったらグリフィンボールが何点減点されるか考えてよ。それに捕まるに決まってるわ。まったくなんて自分勝手なの」（二二七）

また、スネイプ先生によるこのような注意もある。

「ポッター、警告しておく。これ以上夜中にうろついているのを見かけたら、我輩が自ら君を退校処分にするぞ。さあもう行きたまえ」（三九四）

夜中に校内を歩くことは、こうも執拗に警告されることなのである。だからだろうか、物語にとって重要なことは、かならずといっていいほど夜中に起こる。両親の姿が映る「みぞの鏡」は夜中にしか見にいけないし、ハグリッドのドラゴンを引き渡す約束をしたのは、深夜の塔だった。賢者の石をヴォルデモートの手から守るためには、夜、立入禁止の廊下にいかなくてはならない。そのために、ハリー

は父親の残してくれたという「透明マント」をかぶる。魔法の道具を使って透明になったハリーは、自身がもつとも恐れていたはずの「隠れた存在」に、期せずしてなってしまうている。外部からの力によると同時に、自分の意志でもまた、ハリーは自分の存在を隠蔽していた。このように、ハリーは徹底して存在を隠されようとしている。

秘密のリーク

こうして、隠されているものがある。最大の秘密であるハリーについて迫るためには、作中でどのようにして隠蔽が暴かれているかを確認する必要がある。

『ハリー・ポッターと賢者の石』において、内実の暴露は「リーク」によって行われている。物語の冒頭、隠されているのは魔法界だった。入口を隠す場所の名前が「漏れ鍋」であることに注意したい。英語で書かれた原著だと、この場所の名前は“the Leaky Cauldron” (88)である。直訳すると「中身が漏れている (漏れやすい) 大鍋」ということだが、leakyにはとうぜん、「知られてはいけない秘密が」漏れやすい」という意味がある。どうやらこの名前には、後者の意味あい色が濃く反映されているようだ。というのも、この場所 (おそらく「マグル」の目にも見える場所にあるからである。いつてみれば、鍋から吹きこぼれる液体のように、魔法界の存在という秘密が一部だけ覗き見えている。このような秘密の「リーク」が、

隠蔽された真実をすこしずつ明るみに出してゆくことによって、物語は前へと進んでいる。

そのような例は、枚挙にいとまがない。それは物語の核が「クレル先生のターバンという隠蔽の裏に、ほんとうの敵が潜んでいた」という事実を知る」ことなのだから、当然とはいえよう。しかし、主人公が子どもであることに起因することでもあるのだろうか、ハリーたちがみずからの手で情報をつかむ機会がほとんどないという点で、この物語は一貫している。秘密への鍵は、他者からの「リーク」——思わぬ失言や覗き見——によってもたらされる。ハグリッドが賢者の石とかかわっていることにはじめて気がついたのは、ハグリッド自身が家に新聞の切り抜きを置きっぱなしにしていたからだ。それをハリーがたまたま見してしまう。そして賢者の石がホグワーツにあることを、ハリーはハグリッドが漏らした言葉を回想し、直観する。

「グリッゴッツは何かを隠すには世界で一番安全な場所だ——
たぶんホグワーツ以外では……」

七十三番金庫から持ってきたあの汚い小さな包みが、今どこにあるのか、ハリーはそれがわかったような気がした。(二三八)さらにハグリッドが口を滑らせたがために、賢者の石の開発者ニコラス・フラメルの名前を知るも、自力ではその人物の詳細を調べることができない。結局、その人物の情報を得ることができたのは、

偶然の産物だった。そして、地下に封じられた賢者の石のもとへ行くために必要な情報——一切を見落とすことのない番犬、「三頭犬」を突破する方法——もまた、ハグリッドがうっかり漏らしたことによってもたらされる。ハリーは、たとえスポーツでは“Seeker”——探し求めるひと——と呼ばれようと、実際には求める真実に辿りつけておらず、情報を手に入れる仕方は一貫して受け身である。現場でみずからの力を駆使する力をもたないこの探偵は、他人が秘密を漏らすのを待つしかない。

星を読む

では、ハリーにはいったいなにをする余地が残されているのだろうか。それは、漏れてきた情報を読み解くことに尽きる。「禁じられた森」に住むケンタウルの習慣と同じである。たとえ不穏なことが起こることを「惑星の動き」(三七七) から読み取ったとしても、「ケンタウルスは予言されたことだけに関心を持てばそれでよい」(三七七)と彼らの多くは考えているようだ。それは、ハリーがときに考えていたこととよく似ている。

ダメージを挽回するにはもう遅すぎたが、ハリーはもう二度と関係のないことに首を突っ込むのはやめようと心に誓った。コソコソ余計なことを嗅ぎ回るなんてもうたくさんだ。(三六〇)

こうして事態を傍観することを決意したハリーは、このあと、たまたまクイレルが誰かと会話しているところを漏れ聞いてしまう。隠された賢者の石は危機にあると推理されるわけだが、ハリーは「証拠はなんにもないんだ」(三六二)と言って、なにをしようとするわけでもない。彼がようやく動きだすのは、みずからの目でヴォルデモートを目撃し、額の傷が警告のように痛みはじめてからだだった。この意味で、普段はケンタウルスとして状況を傍観しながら、危機になるとみずから行動する人物フイレンツェに、ハリーは重なる。ハリーは、ケンタウルスなら星を読みとることで知ることのできる事実を、他人が漏らした情報をもとに推理する。両者が違うのは、読みとる対象が星かそうでないかという点だけである。

フイレンツェは、「ケンタウルスでさえも惑星の読みを間違えたことがある。今回もそうなりますように」(三八〇)と言い、ハリーのもとを去った。この言葉は印象的に響く。惑星ではないものの、同じく証拠を読みまちがう人物が、何人も描かれているからである。ハグリッドのつれてきたドラゴンを引き渡すときのエピソードは、そのことをよく表している。同学年の生徒ドラコ・マルフォイは、ハグリッドが禁止されたドラゴンを飼っている姿を、小屋の窓から覗き見てしまう。しかし、マルフォイの見た真実を、マクゴナガル先生はつめぼども信用しない。

「べつに天才でなくとも察しはつきます。ドラゴンなんてウソッパチでマルフォイにいつぱい食わせてベッドから誘き出し、問

題を起こさせようとしたんでしよう。マルフォイはもう捕まえました。たぶんあなた方は、ここにいるネビル・ロングボトムが、こんな作り話を本気にしたのが滑稽だと思ってるのではありません?」(三五七)

ここで、マルフォイが目撃した事実は完全に虚構として認識されてしまっている。マクゴナガル先生は、ドラコの証言を「読みまちがった」。またそれは、ハリーたちのスネイプ先生にたいする推理も同じである。ハリーははじめ、スネイプにたいし「僕のこと本当に憎んでるみたい」(二〇九)という感想を抱き、その感情に引っ張られるかたちで、賢者の石を狙っている真犯人もまたスネイプに違いないと確信する。しかしその推理は誤りだった。ハリーたちが自身の隠蔽工作にまんまとはまっていたことを、クイレルはこう嘲笑する。

「確かに、セブルスはまさにそんなタイプに見える。彼が育ち過ぎたこうもりみたいに飛び回ってくれたのがとても役に立った。スネイプのそばにいれば、誰だって、か、かわいそうな、ど、どもりの、ク、クイレル先生を疑いやしないだろう?」(四二四)

このように、ハリーはクイレルの隠蔽をまるで見破ることができていなかった。クイレルやスネイプの言動を「読みまちがった」のである。答えはたしかに証拠を読みとった向こう側にあるのだが、正

しく読み取るこのできる人物はなかなかいない。

クイレルとスネイプを取り違えるように仕向けるこのミスリードが、ハリーにとっても読者にとっても、物語最大の隠蔽であつたように思える。しかし、このクイレルの発言によって謎がすべて明るみに出たわけではない。というのも、「解決編」であるダンブルドアの解説にもまた、隠蔽があるからである。どうして幼い自分をヴォルデモートは殺そうとしたのかをハリーが問うたとき、ダンブルドアはこう答えている。

「おお、なんと、最初の質問なのにわたしは答えてやることができん。今日は答えられん。今はだめじゃ。時が来ればわかるじやろう……ハリー、今は忘れるがよい。もう少し大きくなれば……こんなことは聞きたくないじやろうが……その時が来たらわかるじやろう」(四三九)

答えることを拒否するという、直接的な隠蔽。もちろん、この問いに対する答えは『賢者の石』以降のシリーズで明らかにされている。しかし、物語上の答え——この作品では、欺瞞であることが疑われる——を知らずとも、その裏の顔を予期することはできる。

まず、ダンブルドアのこの発言に乗って、「どうしてハリーは殺されなければならなかったのか」を物語最大の謎と考えてみよう。「ハリーが死ぬ」ということは、現存することを確認できなくなる、したがって、ハリーの存在が隠されるということである。だからこの

問いは、ここまで述べてきたハリーの隠蔽という問題に、死という視点をつけ加えたものであるということが出来る。ならば、「隠蔽された真実は、リークされる情報を読みとった向こう側にある」というこれまでの法則を、この問いを解くための鍵として用いることができるはずである。たしかにハリーは寮杯の獲得に貢献し、全校生徒の前で名前を呼ばれることによって、「発見された」。たしかにハリーは、一年の魔法学校での経験とおして、魔法使いとしての自己を確立した。しかし、これらをハリーの再発見として見ることは、見てくれに惑わされて、証拠を読みまちがってはいないだろうか。物語がリークする痕跡をたどると、決してポジティブではない裏側の物語が見えてくる。

名指しえない秘密

まずプロットに則って考えると、リークを辿っていった先にある最大の秘密は、クイレルという隠蔽の裏側にいたヴォルデモートであると同時に、賢者の石でもある。この両者は、どちらも名指しえないものであるという点で共通している。ヴォルデモートは「例のあの人」(八五)と呼ばれているのになし、賢者の石は「例の物」(一一二)と呼ばれており、これらは原文だと、“You-Know-Who”(55)と“You-Know-What”(73)と表記されている。表記がほとんど一致しているうえに、どちらも「名指してはいけないもの」であるという点でも一致を見る。さらに、片やホグワーツの「何キロも下」

(四〇九)といわれるほど地下深く、片やグリンゴッツ銀行のトロツコに乗らなければいけないほど奥深くにあるという点でも共通する。物語の筋上、最大の秘密とは、そのような直接的な名づけを避けるものであり、地中深くに隠されたものなのである。賢者の石とヴォルデモートは、どちらも同じ性質を持つ、いわば双子のような関係にある。

その片一方、賢者の石がもともと隠されていた銀行の場面に、対になったその関係をなぞる会話があった。

「鍾乳石と石筍って、どちらがうの？」

「三文字と二文字の違いだろ。たのむ、今はなんにも聞いてくれるな。吐きそうだ」(一一四)

この会話には、なんの脈絡も必然性もない。単なる、呼び方が異なるが同じようなものを指す言葉への素朴な疑問に見える。だが賢者の石をハグリッドが引き取りに来たという文脈を考えると、この会話には重要な機能があることがわかる。「例の物」と「例のあの人」の対になった関係を、この会話は繰り返しているのである。対になったものが重要であることが、ここできさねて強調される。

そしてその通り、この物語には双子のように対になった人物が、何人が登場している。文字通り双子のウィーズリー兄弟、管理人のフィルチと飼猫のミセス・ノリス、そしてクイレルとヴォルデモート。彼らはちょうど、クイレルが言う「私の行くところ、どこにで

もあの方がいらつしやる」(四二八) 関係にある。ミセス・ノリスの存在はフィルチの存在を示唆するし、クイレルの存在はヴォルデモートの存在を示唆する。片方がわかれば、もう片方がわかる。そのような相互補完的な関係にある「もう一方」が、最大の秘密であるハリーにも存在している。

その人物とは、ヴォルデモートである。入学したその夜に、ハリーは自身と仇敵との関係を示唆する夢を見ている。

ハリーはとても奇妙な夢を見た。ハリーがクイレル先生のターバンをかぶっていて、そのターバンがハリーに絶え間なく話しかけ、

「すぐスリザリンに移らなくてはならない。それが運命なのだから」

と言うのだ。(一九三)

ここでハリーは、ヴォルデモートと「魂を分け合う」(四四〇) クイレルと同じ立場にある。クイレルと同じく、ハリーはヴォルデモートと対になるべき存在であることが示されている。さらに、ダーズリー家のハリーは、存在していることを隠された人物なのだが、ヴォルデモートもまたそうなのである。ハグリッドの言葉が、ヴォルデモートとハリーの共通点を際立たせる。「やつはまだどこかにいるが、力を失ってしまった、そう考えている物が大多数だ」(八八)。

ヴォルデモートとハリーは、住所不明の無力な存在である点で共通

するのである。しかもヴォルデモートは、「例のあの人」と呼ばれ、直接名指されない性質を持つが、ハリーもまた、ときに存在を隠され、「シーカー」としか呼ばれなくなる。名指されないという、仇敵の最大の特徴においてさえ、両者はときに一致を見る。

さらに、このふたりは、生死にかんして筋が通らない点でも共通する。ハリーが生き残り、ヴォルデモートが死んだということは、一貫して不自然な出来事として語られる。

「あれほどのことをやっておきながら……あんなにたくさん人を殺したのに……小さな子供を殺しそこねたっていうんですか？ 脅威ですわ……よりによって、彼にとどめを刺したのは子供……それにしても、一体全体ハリーはどうやって生き延びたんでしょう？」

「想像するしかないじゃろう。本当のことはわからずじまいかもしれん」(二二)

ここで、ハリーが生き延びヴォルデモートが消えたという事実、まるで「嘘」のようなことと認識されている。これと同様に、ハグリッドはこう述べる。

「……『あの人』は二人「ハリーの両親」を殺した。そしてだ、そしてこれがまったくの謎なんだが……やつはおまえさんも殺そうとした。……ところができなかった。……」おまえの父さ

ん母さんを殺し、家までメチャメチャにした呪いがおまえにだけは効かんかった。」「…あやつが目をつけた者で生き残ったのは一人もいない…おまえさん以外はな。」「…」（八六）

このふたつの引用がともに示しているのは、「ハリーが生き残ったことと、ヴォルデモートが力を失ったことは、どちらも筋が通っていない謎である」ということである。論理的に考えるなら、ハリーが死んでヴォルデモートが生き残るのが当然の帰結だった。しかし、そうはならなかった。互いに、論理の帰結を破っていま存在している。両者は、生死を軸としても双子の関係にある。

では、生と死は物語において、どのように描かれていたのだろうか。それは、ほとんどそれらの区別が意味をなさない魔法の世界のあり方に、端的に表れている。ハリーがはじめて魔法学校を訪れた際、いちばんはじめの衝撃は、ゴーストたちが何気なく姿を現したことであった。

ハリーは息をのんだ。周りの生徒も息をのんだ。後ろの壁からゴーストが二十人ぐらい現れたのだ。真珠のように白く、少し透き通っている。みんな一年生の方にはほとんど見向きもせず、互いに話をしながらスルスルと部屋を横切っていった。（一七二）

隠蔽された世界である魔法界の第一印象は、生者と死者が入り混

じっている空間だということなのである。このことは、「魔法史」の講師でありゴーストでもあるビンズ先生の死に際によく表れている。

ビンズ先生は昔教員室の暖炉の前で居眠りをしてしまい、その時にはすでに相当の歳だったのだが、翌朝起きてクラスに行くときに、生身の体を教員室に置き去りにしてしまっただのだ。

（一九八）

ここに、高齢のビンズ先生にとって、生と死がいかに地続きだったかということが表現されている。これは魔法学校に入学したばかりのハリーがすぐに意識させられることであるばかりか、一年が終わる間に、あらためてダンブルドアから教えられたことでもあった。「死とは長い一日の終わりに眠りにつくようなものだ。結局、きちんと整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険に過ぎないのじゃ」（四三八）。いわく死は、生者の日常という冒険の続きに過ぎない。これはあたかも、ビンズ先生の死をダンブルドアが語り直したかのように聞こえる。ダンブルドアにとってもまた、生と死は断絶されたものではない。魔法学校に入学したハリーが繰り返し学ぶのは、呪文や魔法薬ばかりではなく、魔法界で生と死は隣りあっているという事実だった。

ハリーとヴォルデモートという双子は、この事実を意図せぬまま体現する人物として描かれている。まずヴォルデモートは、生きて

いるのか死んでいるのかよくわからない存在、魔法学校が体現するのと同じような、生と死が入り混じった何者かである。彼は、生きるはずだったが死んでいるという、妥当な推論にそぐわない状態にある。さらに、ヴォルデモートは、もつとはつきりと生死の別が曖昧だと説明されてもいる。フィレンツェは、ユニコーンの血を飲んで生き延びようとするヴォルデモートを、こう描写する。

「……自らの命を救うために、純粹で無防備な生物を殺害するのだから、得られる命は完全な命ではない。その血が唇に触れた瞬間から、そのものは呪われた命を生きる、生きながらの死の命なのです」(三七九)

ここに述べられている「命」のあり方は、「マグル」的には、なかなか理解の及ばないものである。「完全な命」ではない、「呪われた」命とはなにを指すのだろうか。「生きながらの死の命」とはなんなのだろうか。答えは判然としない。ヴォルデモートについて、同様の描写をダンブルドアもまたおこなっている。

「……いなくなったわけではない。どこかに行ってしまっただけじゃ。誰か乗り移る体を探していることじやろう。本当に生きているわけではないから、殺すこともできん」(四三八)

ここでもまたヴォルデモートの命は、生きているものなのか死んで

いるものなのかはつきりしない。フィレンツェやダンブルドアの描写するこの命は、まさに人びとが彼をそう呼ぶように、直接名指すことができないものなのである。ハリーは物語の結末で、意識的に彼を直接名指す(「僕は彼に会ったし、あいつを名前前で呼ぶんだ」[四四七])。しかしヴォルデモート自身が直接名指すことのできない性質をもっているのなら、その呼び名を使うことは、逆に欺瞞となる。ハリーがもし本当に真実と向き合いたかったのなら、ヴォルデモートが名指せない性質を持っていると認めたうえで、「例のあの人」と呼ぶべきだったのである。

その双子の片割れであるハリーもまた、そのような生死のあいまいさを抱えている。ヴォルデモートとおなじく生死の状態が論理的に妥当でないだけでなく、ハリーは、意図せぬうちに死者へ近づく傾向を抱えている。たとえば彼は、ダーズリー家にいたとき、ときおり隣家のフィッグばあさんに預けられていた。そこでハリーは、「ばあさんが今まで飼った猫の写真を全部、無理やり見せ」(三七)られる。ハリーは知らぬうちに、死んだ猫にとり囲まれているのである。また彼は、魔法学校に入学してから、夜な夜な、自分の望みを見せるという「みぞの鏡」に姿を映す。そこに見えるのは、死者に囲まれた自分の姿だった。彼は、死者にとり囲まれた自分の姿に魅入られ、鏡の前に通わずにはいられない。さらに、夜うろついているところをポルターガイストのピーブズに見つかってしまったとき、ハリーは幽霊である血みどろ男爵になりきっている。

「ピーブズ」ハリーは低いしわがれ声を出した。

「血みどろ男爵様が、わけあつて身を隠していることがわからんか」

ピーブズは肝をつぶして空中から転落しそうになったが、あわや階段にぶつかる寸前に、やつとのことで空中に踏みとどまった。(四〇二)

ハリーは、死者である血みどろ男爵の真似をしただけでなく、見事に幽霊の同類であるピーブズをだましている。これは、ハリーと死者に親和性があることを示唆している。そしてなにより、ハリーの額の傷がある。これは先に引用したハグリッドの言葉からわかるように、死の呪いを受けた証だった。いわばこれは、ハリーが「どうして生きているのだろう」と相手に思わせる印なのである。ハリーは、ヴォルデモートほどではないにせよ、生と死の入り混じった命を抱えているのだといえる。ハリーとヴォルデモートは、両者とも生死の折りあいがない、名指しがたい命を抱えた存在なのである。「例のあの人」はふたりいた。

二つの顔をもつ物語

このことが示すのは、さまざまな痕跡をたどった先にある「秘密」が、そのような名指しがたい命の状態のことだということではないだろうか。物語の最大の秘密は、ダンブルドアが隠蔽した、ハリー

の生死にかかわる事実だった。彼に死の呪いを放った仇敵は、生死を容易に判別することのできない命を抱えている。幼いころは存在を隠蔽され、いまも見えない存在になることを恐れる主人公は、生まれると同時に死を刻まれている。それは隠蔽の向こう側にある魔法界そのもののあり方でもあった。生と死の区別は日常と融けあい、ほとんど意味をなさない。生者は目を覚ませば死者となり、死者はゴーストとなつてこの世に留まる。魔法の世界にいちど生まれてしまえば、この世に存在するという宿命から逃れることはできない。そのことに気がついたとき、魔法使いは「呪われた命」を生きることとなる。

健全で前向きな子どもたちを描く表側の物語の一方で、自分が生きているという確信も、最後の行き先としての死も、ごまかしに見せてしまう裏側の物語がある。裏をちらりとでも覗き見てしまったとき、この物語は、ひとつのぞつとするホラー小説となる。

(みやざわ ゆうき・言語文学専攻)

注

- 一 日本語の引用箇所は、J. K. ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』（松岡佑子訳、静山社、一九九九年）から。英語の引用箇所は、Rowling, J. K. *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*. New York: Scholastic, 1999. Print. かん。